日本語の「はい」とスペイン語の sí について

三　好　準之助

目　次

1.「はい」と sí の辞書的なデータ
1.1. 現代語のデータ：単一語辞書の場合
1.2. 現代語のデータ：二言語辞書の場合
1.3. それらの語源的データ
2.「はい」関連の研究について
2.1. 相づちに関する研究
2.2.「はい」の用法
2.3. 相づちの国際比較
2.4. 日本語の否定疑問文への応答について
3. sí の用法について
3.1. 辞書的な情報
3.2. 規範文法での sí の使い方
3.3. 語用論から見た sí の使い方
4. 対応と結論
4.1.「はい」の用法と sí との対応
4.2. sí の用法と「はい」との対応
4.3. 結論
注
参考文献

キーワード：はい，sí，相づち，相手中心主義，個人主義

筆者は長い間，スペイン語を日本人学生に教えてきた。教室では，スペイン語の応答詞である sí は日本語の応答詞の「はい」に対応する，と説明してきた。そう言いつつも，この対応がどうなっているかを明確に理解してはおらず，言う度にかすかな不安を抱いていた。本稿の目的はその基本的な対応の様子を筆者なりに明らかにすることである。日本におけるスペイン語教育の現場の人たちに何らかの参考になれば幸いである。

1.「はい」と sí の辞書的なデータ

1.1. 現代語のデータ：単一語辞書の場合

現代日本語の「はい」や現代スペイン語の sí はどのようなことばなのであろうか。辞書の説明からその基本的なデータを紹介しよう。

1.1.1. 日本語の「はい」

「はい」は普通，日本語学では感動詞として扱われている。小学館の『日本国語大辞典』では，見出し語「はい」に初出用例を添えて4種類の語義が与えられている。語義だけを抜き出すと，①あらたまって応答する時，または，相手のことばに承諾した意を表す時に用いることば。②何か行動に移ろうとするときなどに，注意を促したり，挨拶のことばの上に軽く添えたりして用いることば。③自分の話の末部に添えて，ややへりくだって確かにその通りであると念を押す気持ちを添えるのにいうことば。④牛馬を進める時のかけ声，となる。現代語の用例を付けた北原（編）の『明鏡国語辞典』では，見出し語「はい」に次のような記述がある。記号は読みかえ，語義別に段落をつけると以下のようになる（前者の第1語義が，ここでは最初の2種類の語義に分けられている）。

①相手のことばを肯定したり受け入れたりするときに使う語。ええ。「『引っ越したんだって？』『―，フクロウが鳴くような所です』」「『行かないよね』『―，行きませんとも』」「『田中君，ご案内して』『―，かしこまりました』」。（対義語）いいえ・いや。［語法］否定疑問への答え方については「いいえ」を参照。
②呼びかけられたり話しかけられたりしたときに応ずる語。「『佐藤君！』『―』」「ちょっと，そこの若い人』『―，私ですか』」。
③相手の注意を促すときに使う語。「―，大きく息を吸って」「―，お年玉」。
④自分のことばの末部につけて発言の内容を確認したり真実性を強調したりするときに使う語。へりくだった語感を伴うことが多い[1]。「承知いたしましたとも，―」「五年間の保証付きですから，―」。
⑤牛馬を追うときのかけ声に使う語。はいし。「―どうどう」。
（全体に）丁寧な言い方の口頭語。

なお，上記の「語法」のところで指示されている「いいえ」の見出し語の記述には以下のような語法説明がある。

否定疑問の「まだ終わりませんか？」などでは，「いいえ，もう終わりました」「はい，まだ終わりません」のように，質問内容を否定するときは「いいえ」，肯定するときは「はい」を使う。

1.1.2. スペイン語の sí

西西辞書の記述を見ると，スペイン語の sí は副詞である[2]。Real Academia Española（王立スペイン語アカデミア）の辞書（2001）におけるこのことばのデータは以下のようになって

いる。語義別に段落をつけて示す。

①肯定の意味を表す。質問に答えるときに使われることが多い。
②言われたり考えられたりする内容における特別な断定や肯定の意味を示したり，ある考えを強調したりする。Esto sí que es portarse.「これこそ（行儀のいい）振る舞い方だ」。Aquel sí que es buen letrado.「あの人こそ深い学識の持ち主だ」。
③一緒に使われる動詞が表わす肯定の意味を高めるために強調して使われる。Iré, sí, aunque pierda la vida.「命を落とすかもしれんが，私は行くんだ（ぞ）」。

1.2. 現代語のデータ：二言語辞書の場合

日本語で書かれたスペイン語の辞書（二言語対応の現代語辞書）の場合，日本語－スペイン語のもの（和西辞書）とスペイン語－日本語のもの（西和辞書）がある。

1.2.1. 西和辞書 [3)]

宮城など（編）の『現代スペイン語辞典（改訂版）』では，見出し語 sí の語義が次のように説明されている。まず，副詞であり，英語では yes に相当し，肯定を表わし，対義語が no であることの説明がある。記号は読みかえ，語義別に段落をつけ，句読点を一部変えると以下のようになる [4)]。

①［応答］はい：
　i ）¿Lo quieres? —*Sí* (, lo quiero). それが欲しいか？—はい（，それが欲しい）。¿Viene Juan? —Creo que *sí*. フワンは来るかな？—来ると思う。Dime *sí* o no. はいか，いいえか（承諾かどうか）言いなさい。
　ii ）［承諾］よろしい：Venga usted mañana. —*Sí*, con mucho gusto. 明日来てください。—はい，喜んで。
　iii）［否定疑問・否定命令に対して］いいえ：¿No le gusta la música? —*Sí*, mucho. 音楽はお嫌いですか？—いいえ，大好きです。No lo digas a nadie. —*Sí*, lo diré a todo el mundo. 誰にも言うなよ。—いや，みんなに言ってやる。
　iv）［否定語句に続けて］Vino la señora no sé cuántos; *sí*, esa rubia, y dijo que volvería más tarde. 何とかいう女性が来ました。ああ，金髪の方で，また後で来るそうです。
②［出席をとるときの返事］はい：Santiago Fernández. —*Sí*. サンティアゴ・フェルナンデズ。—はい。
③［電話を受けて］もしもし，はい〔長く伸ばして発音する〕
④［肯定の強調］本当に，もちろん：
　i ）Conozco a tu amigo, *sí*. 私は確かに君の友人を知っている。Iré, *sí*, aunque pierda la

vida. 行くとも。たとえ命を落としたって。Aquel hombre ya no te quiere, pero yo *sí*. あの男はもう君を愛していない。でも私は愛しているよ。

ii）［不定詞＋ sí ＋活用形。動詞の強調］Responder, *sí* (que) respondí, pero … 答えるには答えたんだが… Gustarme, *sí* me gusta. それは好きと言えば好きだ。

1.2.2. 和西辞書

見出し語「はい」について，日本語での用法を十分に念頭に置いて語義を並べているのはルビオなど（編）の『クラウン和西辞典』である[5]。その記述は，略語を戻して会話例を少し省略すると以下のようになる。

①［質問に対して］副詞 sí. 関連語「いいえ」。あれは太郎ですか―はい，そうです ¿Es Taro? ―Sí, eso es. [Pues sí]. 泳げないんですか―はい ¿No sabes nadar? ―No, no sé.（このような否定文の質問に日本語で「はい」と答える場合，スペイン語では “No” と答える）。

②［承諾して］副詞 de acuerdo, bien, bueno,（スペイン，口語）vale, venga,（英語，口語）“okey”.（文例）はい，承知しました Con mucho gusto. Encantado. /（客や上位の人に）Naturalmente, señor.

③［返事］Sí. /（出欠の）Sí,[sic] Presente.

④［相手の注意を引く］（文例）はい，これ Aquí tienes. / Aquí está.（文例）はい，始めましょう Vamos a empezar. / ¡A empezar! / ¡Manos a la obra!

1.3. それらの語源的データ

日本語の「はい」とスペイン語の sí について，その簡単な通時的データを確認しておこう。

1.3.1. 日本語の「はい」について

日本語では応答を表す「はい」「うん」「いいえ」などは感動詞[6]として扱われている。感動詞の変遷を論じている森田良行（203-4）によれば，「は」は本来，不可解さを表す声であったが，これが長呼して「はあ」となり，近世には「ははあ」の形で，疑いに対して了解がついたうなずきへと発展する。納得や了解の気持ちが発展すれば応声となるが，ハ系統は近世，応答語として「はあ」「はい」「あい」「へい」と進んでいった，という。「江戸では『はい』の訛『へい』，畳語『はいはい』『あいあい』『へいへい』も用いられた。かくて今日，東京語では『うう』の流れを引く『うん』と,『は』の流れを引く丁寧語『はい』とが並立することとなる」(204)。16 世紀後半の日本語文法であるロドリゲスの『日本大文典』には，まだ「はい」が登録されていなくて，森田も指摘している通り，HA（ハア）が感動詞として扱われており，「疑ふかのやうな意味を持ち，又後悔する意味を持つ」とある[7]。応答詞の「はい」は江戸時代に使われ始めたことばであろう[8]。

1.3.2. スペイン語の sí について

Corominas によれば[9]，肯定の返答を基本的な機能とする sí は，もともとラテン語の sīc（副詞，「そのように，このように」）に由来している。まず，古スペイン語でこのラテン語が sí の形で同様の意味で使われていたが，それが 10 世紀後半には副詞を補強する接頭辞の a- を加えて así の形で使われた。así は「そのように，このように」という意味の副詞で，現在まで使われている。他方，sí は語源的な「そのように，このように」という意味で 14 世紀にも使われていたが，すでに 12 世紀には sí fago ‘hago así como dices’「私はおっしゃる通りに，そのようにいたします」のように動詞を伴って使われるのが普通であった。ところが，12 世紀にも既に動詞を省略して単独の sí で肯定の応答小辞として使われ始めていた（この用法はラテン語にも散見される），という。12 世紀には sí ということばが「そのように，このように」という意味の副詞として，そして肯定の返答の小辞として使われていたことになる。

他方，García de Diego のスペイン語歴史文法によれば，sí は 3 種類の意味で使われてきたことになる。ひとつは肯定の応答小辞として（p. 383），今日も同じように使われている。1.1.2. のアカデミアの語義①である。ふたつめは確認するための小辞として，本来は先行する否定的な文に対置される形で使われる（383–4）。現代語のアカデミアでは②や③の語義に対応する。そして 1.2.1. の『現代スペイン語辞典（改訂版）』では①［応答］の 4 番目［否定語句に続けて］に相当することになる。みっつめは願望の意味の小辞として宣誓の文型のなかで使われる用法である（410–411）。この用法は，上記の Corominas が言及している「そのように，このように」という意味の副詞の，その使い方が拡張したものであろう[10]。なお，sí は「はい」と違って，その語源に関する問題は存在しない（Alvar & Pottier 1983: 340）。

2.「はい」関連の研究について

日本語の「はい」は相づちを打つ時に使われる。相づち語である。この節では「はい」関連の研究を，相づちに関する研究，「はい」そのものの研究，そして「はい」の対照研究にわけて眺めてみよう。

2.1. 相づちに関する研究

この項では相づちに関するこれまでの研究を，相づちとは，発話姿勢と相づち，相づちの「はい」，に分けて概観する。

「はい」ということばは肯定の応答に使われる感動詞であるが，筆者にとっては Miyoshi（2012）や三好（2013）で論じたように，日本語の和らげ表現の表現手段のひとつである。筆者は暫定的に，その表現手段を 3 種類に分類して考える方法を提案している。ぼんやり型・遠回り型・隠れみの型である。「はい」はそのなかの遠回り型に属している和らげ表現の表現

手段であるとする。話し手が自分の主張を和らげる表現のことであり，日本の社会構造の仕組みの特徴のひとつである「相手中心主義」と結びついていると仮定している。同時に，「はい」は相づちと呼ばれる日本語の応答形式に含まれる表現手段のひとつでもある。そして相づちという応答形式は，日本語における発話姿勢に関する根本的に重要な現象ではないかと思われる。ふたりが話をするとき，その話し方に相づちを打つ，という応答があるということは，ふたりが発話行為を協力しあって成立させている，ということである。しかしその打ち方は対等でない。なぜなら，相づちとは刀工の親方の指示に従ってその弟子が打ち下ろす槌（ツチ）のことである。両者にはタテ型の上下関係があり，ふたりの打ち方は対等ではなく，親方（話し手）が優先されている（相手中心主義）。筆者は，日本では社会の最小構成単位が小集団であると仮定している（この社会構造の仕組みをグルピスモと仮称しているが，小集団主義とも呼べよう）。そしてこの社会的行動規範のなかでは，上下関係を尊重するタテ型体系と話し相手を基準にして自分の社会的な相対的位置を決める相手中心主義が機能している，と仮定している。日本語の問題を扱うに際して，個人主義が確立されている欧米系の言語学の知見を応用するときには，この点を意識することが根本的に重要になるのではなかろうか。筆者は本稿において，このように欧米社会と異なった日本の国語に含まれる「はい」について，スペイン語の sí の使い方と対比することによって，その使い方の違いを確認してみたい。

2.1.1. 相づちとは

相づちという言語現象を解説している古典的な資料に国語学会（編）の『国語学大辞典』がある。筆者の理解を補強してくれているので，以下に一部を再録しておこう。見出し語「うけこたえ」の中の子見出し「あいづち」の記述である。相づちはうなずきなどのゼスチャーで発信されることもあるが，ここでは国語学の辞典であることから，ことばの解説に限られている。

> 上手なあいづちは話し手の気分をよくし，話をなめらかに運ばせる役を果たすから，談話（会話）における最も望ましい態度の一つであり，聞き上手の大切な要素でもある。現代語では，「ん」「ええ」「はあ」のように，単に聞いていることを表すもの，「いかにも」「なるほど」「そうですなあ」のように，相手の話を肯定するもの，「それで」「とおっしゃいますと」「と言うことは」のように相手の話を積極的にさそい出すもの，「ほほう」「まあ，おもしろい」のように，相手の話に興味をひかれていることを示すものなど，いろいろある。なお，あいづちと言っても，語源は刀剣を鍛える際のことばであって，師弟の意気が合わなければできないことである。しかし，あいづちということが固定してくると，そのことが忘れられ，時には，「まさか」「そうですかね」のような，否定や不同意のことばも，場合によっては有効なあいづちとなる。

ここには「はい」が含まれていない。そして刀工の師弟が意気（息？）を合わせることが指摘されているが，そこに師匠と弟子のあいだにある上下関係には言及されていない。

また，否定のことばも相づちに使われることがあると説明されているが，否定の応答詞についてもそれが相づちに関連していたはずだと論じる研究者に，池上禎造（1952）がいる。彼は日本語の否定応答詞の歴史的な発展型として「イナ―イサ―イヤ―イエ―イイエ」をあげているが，それらはみな一次的な感動詞であって，ヨーロッパ諸語の no のようなはっきりした否定の要素をもってはいないと判断している[11)]。「はい」のみならず，「いいえ」も相づちとして使われてきたのであろう。とはいえ，日本語の談話で否定表現が避けられるのも，この相づちと密接な関係がある。『国語学大辞典』が説明しているように，発話行為がふたりの協力で成立しているという前提があるからには，話し手の発言に対して否定の返事をすることは，ふたりの共同作業の続行を難しくし，息を合わすことができなくなる。そのような発話姿勢では，否定の返事をするのが難しくなるのは当然であろう。

他方，上記の記述には「『ん』『ええ』『はあ』のように，単に聞いていることを表すもの」という指摘があるが，同様の指摘は水谷修（1979: 94）にもある。水谷は「あいづちとして典型的に用いられる『はい』ということばが，よく『イエス』という英語と関連づけられて議論の対象となることがある」が，それは相づちの意味がよく理解されていないからであり，「あいづちをうっている人達が本当に内容を理解しているかどうかということは，この際問題にはならない」と言っている。また中村平治（1988: 138）も，「日本語の『はい』が不明瞭になりやすいのは，これが『承諾』の意味の他に，ただ単に『聞こえています』の意味しか担っていないという事実があるからである」と述べている[12)]。

また「相手の話を積極的に誘い出すもの」という相づちの種類にも言及されている。『国語学大辞典』での例は「それで」「とおっしゃいますと」「と言うことは」であるが，McGloin はこの働きが「はい」の機能の一部でもあるとしている（1998: 118）[13)]。

相づちの研究は 1980 年代から盛んになってきた。そして現在も続いているが，その機能については黒崎（1987），畠（1988），松田（1988），水谷信子（1988），堀口（1991）が参考になる。そして堀口（1997）がそれまでの研究成果を総括している。堀口（1997）は第 2 章を「聞き手の役割 1」として相づちを扱っていて，その章は 2.1. あいづちに関する研究，2.2. あいづちとは，2.3. あいづちの機能，2.4. あいづちの表現形式，2.5. あいづちのタイミング，2.6. あいづちの頻度，2.7. あいづちの差異と要因，2.8. あいづち研究の課題，という下位分類から構成されている。とくに興味深いのは 2.3. の「あいづちの機能」であるが，そこでは「聞いているという信号」，「理解しているという信号」，「同意の信号」，「否定の信号」，「感情の表出」に分けて実例を提示しつつ，機能の仕方が分析されている。

2.1.2. 相づちと発話の姿勢について

筆者は三好（2013: 10-11）で，Beinhauer（1978: 113）の指摘に従って「西欧の個人主義の

社会では，社会を構成する最小単位は個人であり，個人はそれぞれの社会で認められている個人の権利を主張し，発話のそもそもの行為には全面的な責任を負う。そのような社会では，二人の発話者は互いに対向者として対峙しているのである」と述べた。日本語の談話での相づちを打つ姿勢とはかなり明白な相違を示している。今回，同様の指摘のある文献が見つかったので紹介しておこう。フランス語の世界のことだが，ドルヌ（1988: 38）である。彼女は「フランス語の談話（ディスコース）についての研究，特に社会言語学や語用論の研究に目を通すと，そこではディスコースはもっぱら議論の組み立て［…］，談話の交渉［…］という面から考察されており，つまりディスコースは結局は相手を納得させる技術に要約されるものとして考えられているという印象を受ける。即ち，フランス語では，話し相手は敵であり，ディスコースとはその相手と一戦を交えることだと理解されているように思われる」と言う。筆者はこの指摘が個人主義の世界における発話姿勢の要諦であると考えている。個人と個人が対決しつつ成立する談話の形式が，いわゆる対話である。それゆえ筆者は三好（2013: 7）で，日本語の話者とその相手は，会話（conversación）をしているのであり，対話（diálogo）をしているとは考えにくい，という指摘をした（そしてその注 4 に，この指摘が妥当であるという様ざまな意見を紹介しておいた）。

2.1.3. 相づちの「はい」について

「相づちの『はい』」というとらえ方で，すでに 1979 年に我々の注意を引いていたのは水谷修である。彼は『日本語の生態』を出版したその年，国立国語研究所日本語教育センター日本語教育研修室長であった。相づちにしろ「はい」にしろ，その後の研究を見てもわかるように，外国人に日本語を教える現場ではそれを理解することの必要性が痛感されてきた。上記の出版の当時，外国語としての日本語教育の現場では，「はい」と yes，「いいえ」と no が安易に対応させられていたようである。水谷修は「我々は，単純に考えて，『はい』ということばが『イエス』に相当し，『いいえ』が『ノー』にあたると考えがちである。事実，日本語を学習する英語国民の場合には，当初はそのように学び，使う。しかし，日本人の使い方が，それからかなりずれているということに気がつきはじめる。やがて，英語の『イエス』『ノー』と，日本語の『はい』『いいえ』とはどうも対応しないようだと言いだす」（1979: 106-7）と指摘している。そしてそのような状況を是正するべく，同書の第四章「日本語の話しことば，話し方の特質（その二）――共存・同一化志向――」で相づちの存在に注意を喚起し，「あいづちの『はい』」という一項を設けて，日本語の「はい」の機能をやさしく説明している。「相づちのことばとしての『はい』を，単純に『イエス』におきかえてしまうと，非常におかしい会話の形になるわけである」（1979: 97）と述べている[14)]。

2.2. 「はい」の用法

相づちから発展した「はい」の機能や用法についても様ざまに研究されている。それらのな

かから本稿に関連する情報を集めてみよう。

「はい」の用法は，『明鏡国語辞典』によれば5種類ある（cf. 本稿 1.1.1.）。①の「相手のことばを肯定したり受け入れたりするときに使う語」の用法には相づちの用法も含まれるであろう。②の「呼びかけられたり話しかけられたりしたときに応ずる語」は応答詞と呼べる。③の「相手の注意を促すときに使う語」は相手の発話に関係なく，（絶対）文頭に現れるが，この用法には⑤の「牛馬を追うときのかけ声に使う語」の用法も含まれよう。④の「自分のことばの末部につけて発言の内容を確認したり真実性を強調したりするときに使う語」は話し手が自分の発話の末部につける「はい」の用法である。

中島（2001: 78-9）は「はい」や「いいえ」を応答詞として扱い，それらの機能の詳しい分類表を示している。上位の分類は「応答要求文に対する応答」（疑問文に対する応答を含む）・「応答非要求文に対する応答」（相づちの機能を含む）・「非応答表現」（上記の5種類のなかの③と④を含む）の3種類である。冨樫（2002）は「はい」と「うん」の関係を論じているが，それらの用法を大きく「相づち表現に用いられる」場合，「応答に用いられる」場合，「トピックの切れ目に現れる」場合に分けている（さらに繰り返しの用法も扱っている）。本稿では中島（2001）や冨樫（2002）に従って「相づち用法」（応答非要求文への応答），「応答用法」（応答要求文に対する応答），「非応答用法」の3種類に分けて，既存の研究から有用な情報を集めてみよう。

2.2.1.「はい」の相づち用法

北川（1977: 66）は「はい」の相づち用法と応答用法を区別してはいないが，「はい」の固有の意味を示している。それは相づち用法になろう。「『はい』は相手の言ったこと，また伝えんとすることが，こちらにはっきり届いたということを敬意をもって表示するための応声である」と定義している。そしてこの意味づけの主眼点は，「はい」から，「普通その意味合いであるとして良く言われる『承諾・肯定』の意をとりさることにある」とする。とすれば，（肯定の）応答用法を認めないということにもなる（本稿の 2.2.3. 項で紹介するように，北川は非応答用法について言及している）。田窪・金水（1997: 264-5）は，「はい」による応答でも「単に相手の発話を聞き取ったという意図で発せられるもの［応答］は，主として相手の叙述文を承けたり，相手の発話の途中で相づち的に用いられたりする」とある。また，冨樫（2002: 135）は，「『はい』『うん』によるあいづちは，どちらも相手の発話に対する反応と言えるが，あいづちを打つ側がその発話情報によって知識を充足させた場合には『はい』，そうでない場合には『うん』が相対的に用いられやすいという違いが認められる」とする。

本稿では，聞き手（話し相手）が話し手の話の途中で，その発話を聞いているという信号として入れる「はい」を相づち用法であると理解しておこう。

2.2.2.「はい」の応答用法

「はい」は，聞き手が相手の発話を聞いているという信号として使われるときが相づち用法

であるとすれば，相手の発話内容を了解したという信号として使われる時に応答用法となる，といえよう。肯定的応答である。「応答」という術語については冨樫（2002: 135）の定義に従っておこう。彼は「あいづちとは異なり，応答は『発話権を得る』発話行動であるといえる。相手の発話が何らかの情報を求めるものであるとき，それに対する反応が応答である」と説明している。

筆者は「はい」の基本的機能が相づち用法であると考えている。そして「はい」に応答用法（肯定的応答）が加わったのは，日本語研究史で 19 世紀後半から見られる西欧語との対比がきっかけとなったのではないかと仮定している。池上禎造（1952: 57）がその論拠となる見解を提供してくれている。彼は「ハイとイイエの二つの系統の，問題になる点を見てきたのであるが，これらを肯定と否定と分ける場合に考へておくべきことがある。明治六年の小学読本二の

［…］〇然り我は甚だこれを好めり［...］〇否男児は人形を持たずして鞭を持てり

のやうな文章の様式が直に日本人に浸透したかどうかは別としても，近代西欧語に yes と no をはっきり言ふ習慣は徐々にわれわれに取入れられた」と断言しているからである（原文の漢字は現代の常用漢字に変えた）。

大浜（2004）は自然な会話における真偽疑問文と応答詞「はい」の関係を調べて報告している。大浜は「日本語学習者の中には，真偽疑問文に対して『はい』のみで応答し，ぶっきらぼうな印象を与えてしまう人がいる。応答には応答詞だけではなく，『そうです』や疑問文の述語の繰り返し等を組み合わせて答えるのがよいと教えられることがあるが，どのような真偽疑問文にもそのような応答が適切なのであろうか」と問い掛け，自然会話の真偽疑問文を分析して i.「はい」のみの応答（24.8%）・ii.「はい」を伴う応答（16.4%）・iii.「はい」のない応答（58.8%）の 3 種類に分け，その使い分けの基準を探っている。それらは，i. 疑問文の命題内容が真であることが応答者にとって自明の場合には「はい」のみの応答，ii. 疑問文の命題内容が，応答者の直前の発話内容の延長線上にあるもので，質問者がその場で新規に提示したものであるとき，応答詞と「そうです」あるいは疑問文の述語が繰り返される，「はい」を伴う応答，iii. 疑問文の命題内容が，応答者がそれ以前に思考することも発話することもなかったものである場合には応答詞は使われず，「そうです」とか疑問文の述語が繰り返される，「はい」のない応答，となるという。しかし「応答形式を決定する要因はこれのみではない」と断ってもいる（2004: 44）。筆者は「はい」が本来相づち語であると理解しているが，このことから判断すると，i. は単純な相づち，ii. は相づちの配慮表現（情報の確認），iii. は相づちの打ちにくい問の場合，ということになろう。

2.2.3.「はい」の非応答用法

「はい」の非応答用法とは，『明鏡国語辞典』の語義の ③「相手の注意を促すときに使う語」（「は

い，大きく息を吸って」「はい，お年玉」）と ④「自分のことばの末部につけて発言の内容を確認したり真実性を強調したりするときに使う語。へりくだった語感を伴うことが多い（「承知いたしましたとも，はい」）に相当する。本稿では一応，③の場合を絶対文頭用法，④の場合を文末用法と呼ぶことにする。

北川は絶対文頭用法に言及している（1977: 67-8）。物を手渡す時だけの用法（「はい，お年玉」）であり，相手の注意を促す「はい，大きく息を吸って」に準ずる用法は扱っていない。とはいえ，いつでも相手に「はい」と言って物を手渡すことができるわけではなく,「そういってもおかしくないのは，手渡す行為が，何等かの意味で相手の意にかなう（つまり相手がこちらに伝えんとしている事に対して受け答えになる）という予想が立つ時に限るのである」と解釈している。さらに言い換えて「そのものを手渡す行為自体が,『あなたが私に期待していることはわかっています，現にこれがその証明です』と言える性質のものであるからではないであろうか」と述べている。

松田（1988: 60）は日本語の相づちについて述べるとき，文末用法に言及して,「聞き手だけでなく，話し手もうなずきながら話すこともしばしばあり，自分の発話の後に『はい』や『ええ』をつけて，気持ちを強調したりすることもある」と解説している。

また，山根は電話の会話を資料にして「はい」などの機能を調べたが，その結果「はい」の「最も重要な機能は前発話を受け入れ，話の主導権交代に影響しない会話促進機能である」（1994: 351）と解釈している。そしてその非応答用法に言及して「会話全体でみると必ず開始部と終結部にその多くが現れるのである。このことは,『はい』が会話開始の了解，及び会話終結の了解の機能を持つことを示すものである。また例（14）[「はい，お待たせいたしました」] に見られるように，一度中断した会話を再び開始するための，会話修復の機能も持ち合わせている」とする（1994: 352）。会話開始部の「はい」は例文 14 のように絶対文頭用法に，会話終結部のは文末用法に当たるであろう（しかし「話の主導権交代に影響しない会話促進機能」と「会話終結の了解の機能」とは矛盾したものにならないであろうか）。

他方，田窪・金水（1997: 265）も文末用法にふれて「以上が，本日の報告です，はい」という例文をあげ,「これは,『こちらの出力が終わったので，そちらで処理に移られたい』という信号として機能するであろう」と解釈している。

中島（2001）は非応答表現のなかに「はじめの『はい』」,「おわりの『はい』」を含めてはいるが，その機能についてのコメントは見当たらない。

冨樫（2002）は絶対文頭用法と文末用法を「トピックの切れ目に現れる」ものとして一括して論じている。文末用法については「締切過ぎても論文が完成しないんです。もう大変でしたよ，はい」などの例文をあげて,「このような『はい』『うん』は自分の発話を完結させる働きを持つ。『はい』『うん』を発話することで,『これ以上の話はもうない』という意思表示になり，発話権を相手に与えている」と解説している（138-9）。しかし絶対文頭用法については「あい

づちや応答の箇所で今まで述べてきた『何らかの情報に対する反応』は，会話冒頭では想定することができない。にもかかわらず，『はい』が発話できるのは何故だろうか。それとも何か非言語的な文脈上で反応しているのか」（140）と問い掛けはするが，明確な回答は見当たらない。

2.2.4. 非応答用法に関する補足事項 [15)]

「はい」の用法について先行研究を調べたが，本稿に参考になりそうな情報は以上である。「はい」について「相づち用法」，「応答用法」，「非応答用法」の 3 種類の用法ごとに先行研究の主張を並べてみた。「相づち用法」と「応答用法」は上記の内容で，基本的な情報はほぼ理解できるであろう。しかし「非応答用法」については，筆者の考え方を述べておかなくてはならない。先行研究の解説とは異なった解釈をしているからである。

非応答用法のなかの絶対文頭用法については，北川は相手に「はい」と言って物を渡すとき「手渡す行為が，何等かの意味で相手の意にかなう（つまり相手がこちらに伝えんとしている事に対して受け答えになる）という予想が立つ時に限るのである」と解釈している。筆者はこの解釈が，教室で授業を始める先生が学生たちに向かって「はい，それでは授業を始めます」と言ったり，講演会場で司会者が聴衆に向かって「はい，皆さん，こんにちは」と言ったりするときにも通用すると考えている。すなわち，日本語の談話形式を決める基本的な仕組みである相手中心主義によって学生や聴衆を主役に据えて，学生の授業が始まるということに対する期待（覚悟？），聴衆のさあ始まるぞという期待，それらの期待に相づち的に応える用法ではなかろうか。

絶対文頭用法については，さらに，『日本国語大辞典』での語義④，『明鏡国語辞典』の語義⑤の，牛馬に特定の行動を積極的に促す掛け声の存在を考慮するべきであろう（cf. 1.1.1.）。この掛け声の用法は，17 世紀初頭に編さんされた野田良治（編）『日葡辞典』（1963: 198）にも「Fai. ハイ（はい）」として登録されている（この辞典には，まだ，「はい」の相づち用法や応答用法の記述は含まれていない）。積極的に相手の行動を促す使い方によって，授業や講演に対する心の用意を促している，とは考えられないであろうか。学生や聴衆の期待に相づち的に応える用法の根底には，この掛け声の用法が残っているように思われる。

他方，文末用法については，『明鏡国語辞典』では「自分のことばの末部につけて発言の内容を確認したり真実性を強調したりするときに使う語。へりくだった語感を伴うことが多い」とあり，松田も同じように「気持ちの強調」と解釈しているが，田窪・金水は「こちらの出力が終わったので，そちらで処理に移られたいという信号として機能する」と解釈しているし，冨樫は「これ以上の話はもうないという意思表示になり，発話権を相手に与えている」と解説している。しかしこれらの解釈は，用例の文脈的な情報に引きずられているのではなかろうか。筆者はかつて観光バスに乗ったとき，バスガイドが「今日は本当にいい天気になりましたね，はい」と言うのを聞いたことがある。当然そのあとも滔々と窓外の名所旧跡の解説を続け

た。この用例の「はい」は，相手に対して，こちらの話は終わったのでサアお話しくださいという信号になるのだろうか。

文末用法については，筆者は次のような仮説を立てている。すなわち，話し手が話し相手の発話内容を繰り返して，それに相づちの「はい」をつける用法，の応用ではないかと考えている。たとえば「年内にあげますか？」という質問に対して「年内に。はい」と答える談話パターンである[16]。文末用法はそのパターンの応用として（話し相手に，該当する発言が存在しないのに），話し手が自分の発話内容を話し相手が言ったものと仮定して，その仮定の発言を繰り返してそれに相づちの「はい」を打つ，という仕組みではないかと理解している。話し手は自分の発話を相手に投げかけるが，相手も当然その内容を是認していると仮定して，その想定に基づいて相手の是認に相づち的に応える用法ではないだろうか。スポーツ選手などが報道記者のインタビューに答えるときに文末用法の「はい」が多用されることもあるが，伝えたい気持ちは「あなた方のお考えの通りに」というニュアンスが表現されているのではなかろうか。「やはり」「やっぱり」などと同様の用法である。この筆者の仮定は，『日本国語大辞典』の「ややへりくだって確かにその通りであると念を押す気持ちを添えるのにいうことば」であるという定義や『明鏡国語辞典』の「へりくだった語感を伴うことが多い」という指摘に準ずるものである（cf. 1.1.1. と注 1）。そしてこの発話姿勢は，筆者が仮定している日本語世界の「相手中心主義」という特徴が発現した現象のひとつであると解釈される（cf. 2.1.）。

2.3. 相づちの国際比較

応答詞としての「はい」と外国語の相当語との対照研究は，筆者の調べたところでは多くない。しかし「はい」も含まれる相づちについては，いくつかの対照研究が発表されている。おもに雑誌『日本語学』の 1988 年 12 月号に特集された相づち研究の論文である。この項では外国語の「はい」相当語を念頭に置いてそれらを概観してみよう。

2.3.1. 米語（英語）の相づち

シカゴ大学の Yngve は早くも 1970 年に発表した，会話における発話権（turn）の移動に関する研究で “In fact, both the person who has the turn and his partner are simultaneously engaged in both speaking and listening. This is because of the existence of what I call the back channel, over which the person who has the turn receives short messages such as “yes” and “uh-huh” without relinquishing the turn.”（1970: 568）と言って相づちの存在に言及している。英語のことか米語のことかは判明しないが，「はい」の相当語であるとされている yes が相づちとして使われることが分かる。

大曽（1988: 46）は，オックスフォード大学出身者（英国人？）との談話（個人的な語法か一般的な語法かは不明）で，「こちらが肯定文を言うと短く Yes，否定文だと No，それ以外のあいづちは一切入らない」という経験をしている。しかし「アメリカ英語であいづちとして

よく使われる単語や短い表現には，前にあげたRight，Yeahの外，Uh-huh，Um-hum，O.K.，Oh yeah，Really，I see，Uhなどがある」（46-47）と報告している。相づちは英語よりも米語に多く使われる，ということであろうか。また，米語では相手の否定文への応答詞として使われるのはNoではなくてYeah，Rightが使われることから「アメリカ英語のRight，Yeahは日本語の『そうね。』『そうだね。』と非常に近い用法を持つということが分かる」（48）と述べている。

メイナード（1987: 90）は日米の相づち表現の対照研究で，日本語会話で相づちが送られるコンテクストの8割以上が「発話中の短いポーズ付近，又は話のリズムにあきが見られた時におきた」が，「米会話のあいづちは，ほとんどが文単位の終わりで，そしてポーズ付近で送られることが解る」と言っている。この時の調査はメイナード（1993）にも含まれているが，そこでは日米の会話における相づちの存在をかなり広く認めていて，その機能の6番目は「情報の追加，訂正，要求などをする表現」である（1993: 160）。この機能を相づちに認めるかどうかは，それぞれの研究者の定義によるし，異論もあろう。

2.3.2. フランス語の相づち

日本語の「はい」とスペイン語のsíの使い方を比較する上で，これまでに発表された日本語の相づちと英語以外の外国語の相づちとの対照研究のなかで，最も参考になる，すなわち，筆者の理解に一番近い見解を述べているのがドルヌ（1988）である。少し長くなるが，引用を含めながら紹介してみよう。

彼女はまず始めに（38），相づちが日本語・日本人の特有のものでフランス語・フランス人にはないという「フランス人がいれば，それは偏見以外のなにものでもない」と言い，フランス語にもあいづちは存在するのだと断っている。本稿の2.1.2. 項でも紹介したが，ドルヌはフランス語での話し相手は敵であるとみなされていると喝破し，「相手と対決するという目的がないような友人間の日常会話の場合でも，こうした対決のパターンがコミュニケーションを調整しているように思われる」（38-9）と観察している。相手中心主義の日本では話し手が中心の位置（主役）を占めており，話し相手（聞き手）は主役に協力して談話行為を成立させているわき役であるが，フランスなどの個人主義の社会では，ドルヌや筆者の考えによれば，話し手は発話権を持つ主役であることには変わりないが，話し相手も対等な資格を持った敵であるということになる。この背景を考慮すれば，フランス語での相づちの打ち方に関するドルヌの論評をよく理解することができるであろう。すなわち，彼女は，フランス語では「実際は，あいづちは，つねに相手から求められて，しかもほとんど無意識に行われているのであり，あいづちを打つ者はけっして自由に，好き勝手にそうしているわけではない。どのようなあいづちを打つかということにはある程度まで自由があるにしても，談話の進行に束縛されている以上，聞き手にはほとんどあいづちを打たないことは不可能なのだ。むしろあいづちを打たないためにこそ強い意志の力を必要とするのである」（41）と述べている。すなわち，フランス語

では，相づちは聞き手が話し手の要求に従って打っていることになる。一方，日本語では聞き手が談話のわき役として，話し手に積極的に協力して自主的に相づちを打っているのである。以上は「はい」の相づち用法（cf. 2.2.1.）に関係している。

そして「はい」と oui（フランス語における「はい」の相当語）との使い方である。ドルヌ（1988: 42）は「はい」の応答用法（cf. 2.2.2.）に言及する。「それぞれの言語によってもっとも違いが多いのは，あいづちの打ち方であろう。そして，それは，一見すると共通しているように思われる場合にも，よく調べてみると全く違うということがあるのである。例えば，フランス語と日本語に共通してよく用いられる『hum』/『うん』，『oui』/『ハイ』・『エエ』と言う肯定を示す言葉などはそのケースである。実際，一見したところ，『oui』と『ハイ』はどちらも肯定の意味を持ち，しかもきわめて基本的なあいづちに用いられているので，ほとんど同じ機能を果しているように思われるかもしれない。しかも，どの仏和辞書でも『ハイ』を『oui』の訳語として記述している。しかし，筆者の両言語の使用者としての直感であるが，この二つの言葉はけっして完全に対応しているとは思われない」と述べている。そして真偽疑問文の応答詞として使われる「はい」は「肯定のマーカーの機能に還元されるのか」（42）と疑問を呈するが，それに対する答えとして，真偽疑問文の応答は質問文に含まれる述語の反復が必要であり，「お宅の庭は広いですか」と言う質問には「はい」だけでなく，「はい，広いですよ」と答えるほうが自然であることに注目する。そして「肯定と否定の意味は第一に述語（～ます / ～ません，する / しない）に含まれているのではないか」（43）と自答している。すなわち，真偽疑問文への「応答の肯定，否定が決定されるのは述語によってなのであり，応答文中の『ハイ』や『イイエ』も結局はあいづちの機能を果たしているのではないかと思われるのである」（43）と言う。筆者の主張と同趣旨の見解である。日本滞在が長いとはいえ，フランス人のドルヌがここまで日本語を理解していることには驚かされる。彼女が実に鋭い観察力を備えた言語学者であることを証明しているのではなかろうか[17]。

2.3.3. 英語・フランス語以外の外国語の相づち

（1）ドイツ語：『日本語学』の 1988 年 12 月号の「あいづち」特集にはドイツ語の論考が含まれていない。少し古いが日本語の「はい」「いいえ」とドイツ語の Ja, Nein の対照研究がある。山内貞男（1966）である[18]。彼は「否定の問いに対する応答の仕方の相違」を論考のきっかけにするが，「小論においては，これを否定の問のみに限定せず，肯定の問・否定の問に対する応答の仕方の相違として一般的に取り上げ，問と応答との間を貫いて働く単純明快な肯定・否定の論理によって解釈しようとする」（87）。そして考察の結果，「ドイツ語の応答は媒介を通して間接的に問と繋がり，日本語のそれは隙間を介して間接的に応答文と関係を持つ。同じ応答であっても，ドイツ語の場合は問いに対して一定の間をおいて接し，応答文と同様の，しかし問いに対する主体的な態度決定の表明であり，日本語の場合は問いに直接し，問いに対する主体的な態度決定以前の準備状態の表明であって，

問いに対して取り敢えず応じ答えるという性格を持つ」(95) と言う。筆者には理解することが少し難しいが，おそらく日本語の場合，「はい」「いいえ」が，応答の情報を伝達する以前に相づちとして使われていること，の説明であろう[19]。

(2) 朝鮮語：生越 (1988) は，朝鮮語には肯定の応答詞が 4 種類あるが（それぞれ「はい」，「ええ，はい」,「うん，ん」,「そう」という意味に相当),「あいづちとして用いるときには，肯定の意味はほとんど持たない」と言っている。相づち用法の「はい」とよく似てはいる。生越は結論の部分で「今回みたかぎりでは，韓国人のあいづちの打ち方は，日本人と似た面を多く持っていると言えそうである。しかし，年上（目上）の人に対する態度や対話における積極性の問題など，違う点もいくつか出てきている。これらの点についての詳しい研究は，これからである」と言っている (1988: 16)。相違点のひとつめは，相手が友だちや親しい間柄の人なら相づちを打ち，相手が年上とか目上の人なら相づちを打たない，という傾向のことである (15)。そしてふたつめは，韓国人は話し相手の発言内容に対して何か言いたいことがあれば，相手の話が終わらないうちに，それをさえぎって自分の意見を言おうとする人が多い，ということである。相手が友だちとか親しい間柄の人なら相づちを打つ傾向がある一方で，相手の話が納得できないときには相手が話し終えないうちに自分の発話を開始する，ということであれば，相手が親しい間柄の人であっても，相手との意見が異なれば相づちの入る余地はない，ということになりそうである。ただし水谷修 (1979: 98) は，「はい」に相当する韓国語には「はい」と同じような相づち用法があると指摘している。

(3) その他の外国語：中国語は水野 (1988) と萩谷 (2006) という文献に出会ったが，中国語の基本的な知識のない者にはよく理解できない。タイ語には，宮本 (1998: 24) によれば，相づち用法がないということであろうか。インドネシア語には，正保 (1998) によれば，「それで」とか「その後で」の意味の接続詞は一種の相づち語として使用されることがありそうである。シンハラ語については，ウィラシンハ (2012) がその応答詞の使い方の対照研究をしているが，相づちには特別な注意を払っていない。

2.4. 日本語の否定疑問文への応答について

日本語と外国語（おもに西欧諸語）との対比をきっかけにして，日本語の否定疑問文への応答で,「はい」が否定応答詞（英語・スペイン語では No）に,「いいえ」が肯定応答詞（Yes・Sí）に対応するという理解が行きわたっている。たとえば，本稿 1.2.1. で紹介した『現代スペイン語辞典（改訂版)』では，語義①「[応答] はい」の 3 番目の用法でこのことにふれている。

iii）[否定疑問・否定命令に対して] いいえ：¿No le gusta la música? —*Sí*, mucho. 音楽はお嫌いですか？—いいえ，大好きです[20]。

同辞典では見出し語 no でも，語義の②が「［否定疑問・否定命令に対して］はい：¿No irá mañana? ―No, no quiero ir. 明日いかないのですか？―ええ，行きたくありません。」となっている。また，1.2.2. で紹介した『クラウン和西辞典』でも，その語義①のところで

① ［質問に対して］副詞 sí. 関連語「いいえ」。［…］泳げないんですか―はい ¿No sabes nadar? ―No, no sé.（このような否定文の質問に日本語で「はい」と答える場合，スペイン語では “No” と答える）。

と記述し，同辞典の見出し語「いいえ」では 3 番目の語義として「［否定の質問に対して］（会話）泳げないんですか―いいえ，泳げます。¿No sabes nadar? ―Sí, sí sé (nadar).」と記述している。

このような，日本語の否定疑問文への応答として，「はい」が英語・スペイン語では No に，「いいえ」が Yes・Sí に対応するというステレオタイプの断定もまた，水谷修が『日本語の生態』で指摘しているように，外国語としての日本語教育の現場で「はい」と yes，「いいえ」と no が安易に対応させられていたことの結果として生まれた説明方法ではなかろうか（cf. 2.1.3.）[21]。

2.4.1. 否定疑問文の性格

そもそも否定疑問文が発話されるときの動機が，西欧諸語と日本語で異なっているようである。たとえば英語では，久野暲（1973: 180）によると「否定疑問文のほとんどが，肯定の答えを予期している」のである。スペイン語でも相手の都合をたずねるときに否定疑問文を使うのは，多くの場合，質問者は相手がそうすると思っている内容を確認するときに，肯定の応答を期待して使うはずである [22]。

他方，筆者の理解では，日本語の誘いや相手の都合をたずねるときの否定疑問文はその多くが，話し手の主張を弱める「遠回り型」の和らげ表現に属していて，話し相手が拒否する可能性を前提にした配慮表現なのである（cf. 三好（2013）の 2.2. 項）。別段，いつも肯定の応答を期待しているわけではない。それどころか，否定的な応答を期待していても，儀礼的にたずねてみる，という場合さえある。

スペイン語では相手の都合をたずねるとき，たとえば ¿Quieres ir conmigo?「（直訳）私と一緒に行きたいですか」のような肯定疑問文を使うのが普通である。だから逆に，スペイン語話者が日本語で会話をするとき，「私と一緒に行きませんか（行きたくないですか）」と否定疑問文でたずねられると，同行を強制されているような印象を受けるようである。否定疑問文の ¿No quieres ir conmigo?（文字通りなら「行くことを欲しないのか」）でたずねるときには，話し手は相手が当然行くはずだが，行かないわけがあるだろうか，という気持ちでたずねているからである [23]。

2.4.2. 応答詞の「はい」と「いいえ」

筆者は「はい」の機能は相づち用法が基本であると仮定している。それが肯定の応答用法の機能を果たすときにも相づち語の性格を残している。その結果であろう，水谷信子（1985: 156-7）は「はい」（と「いいえ」）の独立性の強さ，すなわち応答表現での後続の動詞句との結びつきが弱いという性格を指摘している。「はい，行きます」「はい，行きません」と言えるからである。このことは逆に，質問が肯定であれ否定であれ，応答者の答えが肯定なのか否定なのかは，応答詞だけではわからず，後続の動詞句を見なければ判明しにくい，という現象にもつながっている[24)]。

他方，「いいえ」のほうであるが，応答詞としても「はい」と同等に扱うことはできない。すなわち，「はい」か「いいえ」か，というような二者択一の選択があるのだと考えては，日本語の応答の実態をよく理解することはできない。なぜなら，「いいえ」には使用制限があるからである。「いいえ」（とそのバリエーション）の使い方について，水谷修は興味深い指摘をしている（1979: 107-9）。「いいえ」が使われるのは「相手を激励する時，ないしは，相手を慰める時，謙虚に自分自身をへりくだって相手の言ったことに賛成しないという場合，そして「話の当事者間に利害関係がなく，かなり純粋な情報の伝達に限られる場合」である，として，「おおかたは，相手のもっている考え，判断，価値観などにかかわるものに対して，『いいえ』を使うことは，非常に苦手である。というよりも，それを使ってはいけないという規則が存在すると認められてよいのではないだろうか」とまで述べている。「いいえ」も歴史的に見て当初は相づち用法の機能を果たしていたとはいえ，時間の経過とともに否定の応答詞としての使い方が一般的になっている。現在では相づちとして使うことは，自分に関することで相手にほめられたりしたときに自分をへりくだって（相手の話の途中にでも）「いいえ」を相づちとして打つような場合を除けば，難しいであろう。

2.4.3. 否定疑問文への否定的応答

否定疑問文に否定的に応答する場合，「はい」「いいえ」を機械的にあてはめることは危険であろう。金田一（1981: 240）は，応答者が自分の行く意思を表すとき，「『行かないんですか』と尋ねられた場合に，『いいえ，行くんです』と答えることになっている。[…]『行かないんですか』と言う方は，相手はこちらが行かないと察して聞いている。そう解釈しますから『いいえ，行くんです』と答えなければいけない」と解説している。水谷信子（1985: 155）は，「行きませんか」と聞かれた場合[25)]，それが「勧誘であると解釈すれば『行く』場合は『はい，行きます』になるわけである。ただし，相手が否定の答えを期待していない場合，つまり『行ってほしいんだけど』という含みがあれば『いえ，行きません』と答える場合もあり得る。最近，若い人の間では『はい，いいえ』が英語的になったという意見もあるが，そうではないと考える。本来，『はい，いいえ』は相手の期待に添うか添わないかの表示であるから，相手の期待の解釈によって，『はい』『いいえ』両様の答えの可能性を含んでいるのである」と説明している。

しかしながら筆者は，そもそも勧誘などの否定疑問文への否定的応答の場合に，「いいえ」という応答詞が使われることに疑問を感じていた。その直感を援護してくれるのが久野（1973: 183）である。彼は「散歩に行きませんか」と言う誘いに対して，肯定的応答では「はい，行きましょう」とは言えるが，否定的応答の場合なら「いいえ，行きません」と言う代わりに，たとえば「今，忙しいですから，ちょっと待ってください」などと言う。すなわち「聞き手が同意すれば，『ハイ』というが，同意しない場合には，『イイエ』という代わりに，同意できない理由を述べるのが普通である」と指摘している。

勧誘の否定疑問文に対する否定的応答では，まず相づちの応答詞「はい」で答え，丁寧な人なら相手に配慮して礼の気持ちを「ありがとうございます」の類の表現で応答し，そして否定の理由を加える，という応答形式になるのではなかろうか。

よく似た応答形式に命令文への否定的応答がある。森山（1989: 77）は「早くこい」と言う命令文への応答である「はい。しかし，行けません」という例文をあげて，「聞き取り表示類ではデフォールトとして肯定であるが，あくまで聞き取り表示であり，途中から変わることもあり得る」と述べている。森山の言う「聞き取り表示類」とは「はい，ええ，はいはい」の類であるからには，「はい」は相づちとしてしか機能していないことになろう[26)]。

3. sí の用法について

スペイン語 sí は，語源的には「そのように，このように」という肯定の意味の副詞であった（cf. 1.3.2.）。その使い方を詳しく見てみよう。

3.1. 辞書的な情報

sí は，王立スペイン語アカデミアの辞書では 3 種類の語義にまとめられている（cf. 1.1.2.）。「① 肯定の意味を表す。質問に答えるときに使われることが多い。② 言われたり考えられたりする内容における特別な断定や肯定の意味を示したり，ある考えを強調したりする。③ 一緒に使われる動詞が表わす肯定の意味を高めるために強調して使われる」。まとめると，①は肯定の応答詞としての使い方のこと（I），②と③は発話者が自分の発話内容を強調する使い方（II），ということなる。

『現代スペイン語辞典（改訂版）』では，スペイン語の sí の語義が次のように説明されている（cf. 1.2.1.）。「①［応答］はい：i）「はい」；ii）［承諾］よろしい；iii）［否定疑問・否定命令に対して］いいえ；iv）［否定語句に続けて］。②［出席をとるときの返事］はい。③［電話を受けて］もしもし，はい。④［肯定の強調］本当に，もちろん：i）「もちろん」；ii）［不定詞 ＋ sí ＋活用形。動詞の強調］」。まとめてみると，①の i）と ii）は肯定の応答詞としての用法（I），②と③は単純な応答詞としての応答（I），④は発話者が自分の発話内容を強調する用法

(II)，ということになろう[27]。

結局，sí の用法に関する辞書的なデータをまとめてみると，A.「肯定の応答詞としての用法」（アカデミアの辞書のＩには『現代スペイン語辞典（改訂版)』のＩが対応)，B.「自身の発話内容の強調用法」（アカデミアの辞書のIIには『現代スペイン語辞典（改訂版)』のIIが対応)，ということになる。以下では新たな用法や情報にＣ以下の番号を付ける。

3.2. 規範文法での sí の使い方

スペインの出版社から 2009 年に Real Academia Española などによる *Nueva Gramática de la Lengua Española*『スペイン語新文法』という膨大な（3 千ページに近い）記述的規範文法が出版された。スペインを始めとするスペイン語圏各国の国語アカデミアが協力して作成したものである。そのなかから，本稿に関連のあるデータを選び出して並べてみよう。文末の括弧のなかの数字は同書の項目番号である。

(1) sí は肯定応答の副詞であるが，肯定（afirmación）のみならず，承諾（aceptación）や同意（aquiescencia）を意味する（30.2h)。

(2) sí は話し相手の真偽疑問文への肯定応答詞である：¿Vienes? – Sí.「来ないか？」―「はい」(40.7d)。

(3) sí は話し相手の言ったこと（平叙文・命令文）への同意の応答詞である：Vaya con ~. – Sí, señor.「～と一緒に行きなさい」―「はい，わかりました」(30.11t, 40.7d)。

(4) sí には話し相手の肯定表現を支持する用法がある。Verdaderamente, ciertamente「本当に」の意味になる：¿Qué va a saber si anda en las nubes? – Sí, en las nubes.「あんなにぼやっとしていて何がわかるというんだ」―「まったく，ぼやっとしていて」(40.7d)。

(5) sí には先行文の内容への前方照応的な機能があるから，応答詞の場合，sí だけで応答は成り立つ（30.11q)[28]。

(6) 応答の sí に文や動詞句が後続する場合，それらの要素は先行文（質問文）のなかの焦点を指すことがある（焦点用法)：¿He dormido mucho rato? – Sí, todo el día.「私は大分寝ていたのか？」―「はい，一日中」(30.11s)。

(7) sí には (4) の用法の拡張として，発話者自身の発話内容の断言を強調する働きがある：Sentí que me faltaba el aire. Sí, tenía que salir de allí y coger un taxi.「私は窒息しそうになった。そう，で，そこから出てタクシーを拾わなくてはならなかった」(30.11t)。

(8) sí には (6) と (7) の用法の拡張として，発話者自身の発話のなかで焦点の副詞として働く強調用法がある：Ella sí lo sabía / Ella sí que lo sabía.「彼女はそう，それを知っていました」(30.11r)；El cartero [sí] ha traído el paquete「郵便配達人は（そう，）小包を持ってきましたよ」(40.7e)[29]。

以上の用法を，上記の辞書的な情報での用法である A.「肯定の応答詞としての用法」，B.「自身の発話内容の強調用法」と関連づけてまとめてみよう。

A 関係：(1)・(2)・(3)・(4) は A のバリエーションである。(2) は相手の真偽疑問文への肯定の応答，(3) は相手の平叙文・命令文への同意・承諾の応答，(4) は相手の平叙文への支持の応答である。

B 関係：(7)・(8) は話し手自身の発話内容にかかわる強調用法である。

C：sí の前方照応的な機能。(5)・(6) は新たな指摘である。

3.3. 語用論から見た sí の使い方

語用論的視点からスペイン文法を眺めてみたら，肯定応答詞の sí の用法はどのようにまとめられるのであろうか。この項では Matte Bon（1992）の文法書に述べられている sí の使い方に関する記述のなかから，本稿で考慮すべき点を要約してみる（文末の括弧のなかに I, II の巻数の別と頁数を加えておく）。

(1) 話し相手の平叙文に対して，その肯定・否定に反する立場を話し手が表現するとき，主格人称代名詞とともに sí（あるいは no）を使う：No he estado nunca en París. – Yo sí.「私はパリに行ったことがない」―「私には，ある」(I, 248-9)。

(2) 真偽疑問文に対して，sí だけで応答するとき，応答者が不快な感じを抱いていてもう話したくないというニュアンスを与える（II, 240)。とくに許可を求める質問に対して一度だけの sí による応答は，応答者が嫌がっているかのような印象を与える（II, 248)。

(3) 真偽疑問文に対する応答詞の sí は強い前方照応の要素を備えているので，普通は疑問文の文言を繰り返すことはない。しかし談話という行為を成立させるという語用論的な法則から，質問の内容に関する何らかの情報を加えることになる（II, 244)。

(4) 否定疑問文に対する肯定の応答の場合，応答詞の sí は最低 2 度，繰り返されることが多い：¿O sea que tú tampoco fuiste? – Sí, sí, claro.「君も行かなかったということかい」―「行ったとも」(II, 245)。

(5) 疑問のイントネーションで使われる ¿Sí? は無関心を表現するニュートラルな応答詞である（II, 277)。だから呼びかけに反応するときに，聞き手の役割を引き受けたサインとして使われるが，このときは平叙のイントネーションも使われる（II, 289)[30]。

以上の用法を，上記の用法である A.「肯定の応答詞としての用法」，B.「自身の発話内容の強調用法」C.「前方照応の機能」と関連づけてまとめてみよう。

A 関係：(1) は相手の平叙文に対してその反対の肯定・否定の態度を表明する用法である（本

稿の注 27 と関連する）。

C：前方照応の機能。（3）である。

D：sí の重複用法。（2）と（4）は新たな指摘である。注 30 からもわかるように，重複して応答することで，肯定・同意・承諾のニュアンスが確かになる。

E：ニュートラルな応答詞の用法。（5）である。

なお，語用論から見た sí の使い方ということであれば，その反語法での用法についても付記するべきであろう（本稿の注 29 を参照のこと）。3 種類の西西辞書にその指摘がある。いずれも見出し語 sí のなかで，Hernánez *et al.*（2005）では sí que の反語用法が（Sí que la has hecho buena.「そう，（それは）上手にできているよ」），Larousse（2005）では子見出しの 8 に重複形を出してその反語用法が（nunca te mentirá. –Sí, sí.「（彼は）君に決して嘘は言わないだろう」「そうかもね」），そして Seco *et al.*（2011）では第 2 語義（相手の発話への同意）に見られる反語用法が（¡Sí, sí, pintura!「そうです，絵なんですよ！」）掲載されている。

4. 対応と結論

日本語の「はい」とスペイン語の sí の使い方について，以上のように関連情報を紹介し，筆者の解釈を加えてきた。対比してまとめてみよう。

4.1.「はい」の用法と sí との対応

まず，「はい」は感動詞（間投詞，感嘆詞）である（cf. 注 6）。話し手の特別な発話意図を表示するが，それ自身に意味はない（cf. 定延，2002）。相づち語のひとつとして使われてきたのであろう（cf. 1.3.1.）。

本稿では「はい」の用法を大きく「相づち用法」，「応答用法」，「非応答用法」に 3 分類し[31]，3 番目の非応答用法を「絶対文頭用法」と「文末用法」に分けて検討してきた。

本稿の 1.2.2. で紹介した『クラウン和西辞典』の「はい」の扱いはよくできている。「はい」の用法が①［質問に対して］，②［承諾して］，③［返事］，④［相手の注意を引く］と分けられている[32]。①・②・③は応答用法，④は非応答用法の一部である。相づち用法は適切な対応表現が見当たらないので，用法としてはあげられていないのであろう。

4.1.1. 相づち用法

『クラウン和西辞典』もそうであるが，辞書としては，「はい」は sí と対応されるのが普通である。フランス語 oui の場合も同様である（cf. 2.3.2.）。「はい」は本来的な意味を持っていないが，sí には「そのように，このように」という本来的な意味を持っていて，肯定・同意・承諾などの機能を果たす。そのため，相手の発話の一応の文末でしか応答できないことにな

り，相手の発話の途中で sí を挟むことは難しい。一見相づち的な使いかたであると思えても，やはり相手の発話の文末でしか挟めないであろう。スペイン語の話者なら，sí の用法の E「ニュートラルな応答詞」(cf. 3.3.) を使われたとしても，自分の発話文の途中で挟まれたら,「聞きたくない，もうやめろ」に類する語用論的な情報であると解釈する可能性がある。

4.1.2. 応答用法

応答用法ならいずれの場合の「はい」も，基本的には sí に対応するであろう。とはいえ，スペイン語の肯定の応答詞としては sí のほかに claro など 20 種類以上が使われている [33)]。

4.1.3. 非応答用法

「絶対文頭用法」の「はい」が sí と対応することは考えられない（cf. 本稿 1.2.2. の④を参照のこと）。sí の用法 C（前方照応の機能）の存在に注目すれば，絶対文頭の位置における sí の使用の無理なことが理解されよう。「文末用法」の場合，「はい」に発話者自身の発話内容を強調するという解釈も出されているからには（cf. 2.2.3.），文脈状況によっては文中であれ文末であれ，sí の用法 B「自身の発話内容の強調用法」に対応するであろう。本稿 3.2. の（8）の例文 Ella sí (que) lo sabía. なども「彼女はそれを知っていましたよ，はい」と訳して訳せないことはない（しかし文脈から相手がその内容を認めていないことが自明なら，誤訳になろう）。

4.2. sí の用法と「はい」との対応

まず，sí は副詞であって，「このように，そのように」という語義のラテン語の副詞に由来している。現在では肯定・承諾・同意の意味を持つ応答詞として使われている（cf. 3.2. の (1)）。

本稿では sí の用法や機能を 5 種類に分けた（cf. 3.3.）。A. 肯定の応答詞としての用法，B. 自身の発話内容の強調用法，C. 前方照応的な機能，D. 重複用法，E. ニュートラルな応答詞としての用法，である。

4.2.1. 肯定の応答詞としての用法（A）

話し相手の肯定の応答詞としての sí は，基本的に「はい」に対応する。

4.2.2. 自身の発話内容の強調用法（B）

話し手自身の発話内容を強調する sí は，形式的には「はい」の非応答用法の文末用法の一部に対応する。

4.2.3. 前方照応的な機能（C）

sí の前方照応的な機能は，「はい」には存在しない。

4.2.4. 重複用法（D）

sí の重複用法は，話し手の応答の肯定性を強調するものである。しかし語用論的には，肯定の強調表現であるがゆえに反語的に否定の意味で使用されることもある。他方，「はい」にも重複用法の「はいはい」があるが，「はい」が元もと相づち語であったことから，その重複形

は基本的に話し手が（たとえば声の届きにくい相手に）自分の応答を確認するときに，長音を含む「はーい」と同じように使われる。しかし確認の必要もない相手に向かって使えば，話し手の意に沿わない肯定であることを暗示する場合がある（ゆえに目上の人に向かって使うとき，よく「『はい』は一度でいい！」と叱責されることがある）。そしてその類似用法として話し手は自分の否定的な気持ちを表現することもあるが，sí, sí による肯定的応答の強調用法を利用する反語とはニュアンスが異なる。筆者の解釈では，畳語でもある「はいはい」（cf. 1.3.1.）は，あくまで肯定の応答詞あり，ときに話し手の不本意の気持ちを表現することがある，ということになる。

4.2.5. ニュートラルな応答詞としての用法

sí によるニュートラルな内容の応答は，相手の発話内容に対する話し手の（明確な肯定を意味していない）無関心な応答や，電話や出欠を取る時などの呼びかけに対する単なる応答として使われるが，発話状況によっては「はい」の，相手の発話文に対する相づち用法に対応する。

4.3. 結論

「はい」と sí の使い方を比較検討するとき，まず問題になるのは，日本語とスペイン語の文化的背景が明確に相違することである。「はい」が相づちとして使われ始めた日本は小集団主義（相手中心主義 allocentrism）という構造の社会であって，談話では，話し相手は脇役として主役の話し手に協力するが，sí の使われるスペインは個人主義（individualism）の社会であって，話し相手は話し手と対等な敵対関係にある，という違いである。上記（4.1. と 4.2.）で見てきたように，検討内容を整然とした対照研究の結果として組み立てることは難しい。とはいえ，両者の基本的な対応関係は明らかにすることができた。

「はい」と外国語の肯定応答詞との比較対象がないかと，「相づちの国際比較」に関する報告を検討した（2.3.）。英語については，大曽が「アメリカ英語の Right，Yeah は日本語の『そうね。』『そうだね。』と非常に近い用法を持つということが分かる」と述べてはいるが，「はい」との対応は不明である（2.3.1.）。フランス語についてはドルヌが，oui と「はい」がきわめて基本的な相づちとして使われているものの，よく調べると全く違う，と解釈していて，「はい」の相づち用法の特徴（本来的には肯定のマーカーではない）を鋭く指摘している（2.3.2.）。

否定疑問文に対する応答詞の英語などとの比較がよく話題になってきたが，その説明の多くは「はい」と yes，「いいえ」と no という単純な対応関係から出発しているようである。しかし筆者には，「はい」と「いいえ」を対になる応答詞であるとは考えられない。談話における「いいえ」の使用がきわめて制約されているからである（2.4.2.）。

日本の社会構造は 20 世紀中ごろから急速に変わってきた[34]。日本語の使い方もかなり変化してきている。「はい」の用法やその sí の用法との対応関係も変わってきているかもしれない。本稿は現時点での筆者の仮定的な見解でしかないことをお断りしておく。

注

1)「へりくだり」には対話相手との社会的な位置関係から，かなり微妙な高圧的ニュアンスになることもある。現役の女性の国会議員が週刊誌の記者に向かって「正しく伝えなきゃダメですよ，ハイッ！」と不満をぶつけるような言い方もあるようである（『週刊文春』2013 年 6 月 27 日号，p. 50）。
2) このことばは他に，「賛成」の意味の男性名詞として使われることもあるし，同音異義語として三人称の再帰代名詞（前置詞格）もある。
3) 筆者は今回の調査で気づいたのであるが，原など（編）の『クラウン西和辞典』（2005）には，副詞の sí の説明が含まれていないようである。
4) 以下の語義のほかに，疑問形の上昇調での使い方がある。たとえば桑名など（編）『小学館 西和中辞典』では，見出し語の副詞の sí に 5 種類の語義が与えられているが，そのひとつ（4）に「《疑問形の上昇調で，驚きや命令・賛同の要求などを表して》えっ，まさか，本当ですか；いいね，分かりましたね。Estáte quieto, ¿sí? おとなしくしていなさいよ，いいね。」が含まれている。しかしこの辞書の高垣（監）の第 2 版では語義が 2 種類になり，最初の語義「《疑問詞のない疑問文に対する肯定の返事》はい，そうです」の補足的説明に「相手の発言に対する驚きを表すことがある。（例文）Mañana vendrá aquí tu tío. ―¿Sí? 明日ここに君のおじさんが来るよ。―えっ，本当なの。」と指摘されているだけで，命令・賛同のときの用法には言及されていない。
5) たとえば有本など（編）の『和西辞典（改訂版）』では語義が 3 種類出されていて，それらは ①［答えが肯定の時］sí;［否定疑問に対し否定で答える時］no. ②［出席を取る時］Sí. / Está. /（古語的）Presente. ③［物を差し出して］～たばこです Aquí tiene usted el tabaco. である。ちなみに，出欠を取る時に Presente と答えるのは古語的とあるが，この答え方は，スペインではフランコ将軍の統治時代（1974 年まで）を思い出させる，とコメントするネイティブもいる。
6) 北原（編）の『明鏡 国語辞典』によれば，感動詞という術語は「自立語で活用がなく，単独で文になれるが，主語にも修飾語にもならないもの」と定義されている。そして間投詞，感嘆詞と同義であるとされている。
7) 土井（訳）『日本大文典』，465 頁。
8)「はい」の使用例として，『日本国語大辞典』（2006: 913）には洒落本の用例（1774）「ハイかしこまりました」が紹介されている。
9) Corominas の見出し語 ASÍ での記述による。
10) García de Diego は，同様の意味で así も使われていたが，それは現在では一般的に罵倒語として使われていると説明している。
11) 池上は相づちの古い言い方である「あどうつ」という表現を使って，そのことを次のように述べている（1952: 57）（漢字は現代語に代えた）。「人の話にあどうつ習慣は古くからあったらうが，それが応声考などのねらふ単純な母音風の叫び声なのであろう。呼ばれての返事から，あどうつことにすすみ，そこにおのづから肯定的な意味をもってくる。ところが否定といふのも，謙遜の場合を除いては，あまりはっきり言わない習慣でもあったらうし，又それらはやはりあどうつ程度からでたものでなかろうか。一寸受けとめるだけの音であり，不承不承に口を狭く開くとイの母音を伴ふことになる。イイエの系統の歴史からみて，この想像はあり得ることで，西洋のやうに理性的にもの言う習慣の中で生まれたのではないと考えたい」。
12) この点で気になるのは今石幸子（1993: 98）である。今石は相づちの機能を論じているところで「話し手の発話を単に『聞いていること』だけを伝えるあいづちは存在しない」と述べているからである。定義の違いだけであろうか。
13) In this paper, I have taken a more interactional approach in analyzing *hai* and *ee*. The use of *hai*, in particular, was found to be highly oriented to making the next move in an interaction, be it opening a new interaction, closing an interaction, or taking the next expected action.
14)「はい」と対にして扱われる否定の感動詞「いいえ」は，歴史的に見れば相づちのひとつであった可能性もあるが（注 11 を参照のこと），現代語では否定の要素を色濃く帯びている。そして日本語の談

話では，いくつかの条件に合わなければ使いづらい。少し古い例であるが，金田一春彦（1981: 239）が見つけて報告している小泉八雲の観察がある。金田一によると，小泉は作品『乙吉のダルマ』のなかで，乙吉のことを「どんなときでも一応 yes と言ってから答える」と面白そうに書いているという。乙吉は単に相づちを打っているだけなのであろう。ちなみに，小泉八雲の「乙吉の達磨さん」（1990: 371）には「乙吉は，どんな質問を受けても，たとえそれが否定で答えなければならぬ質問であっても，まず『へー』Yes と答える」とある。実際，日常の談話で「いいえ」が使われる度合いはわずかであるようだ。奥津（1988）は「はい」と「いいえ」の用法と頻度を会話資料に基づいて報告しているが，そこでは，相づち（奥津は「あいのて」と呼んでいる）としてハイ系のことば（「はい」「うん」「ええ」「はあー」など）が使われた割合は，イイエ系（「いいえ」「いえ」「いや」「ううん」など）を含めた応答詞の全使用数の 4 割強であるのに対して，イイエ系のことばの使用が 1 例もない。新しいところでは，中島の報告（2001: 97）があるが，彼女はその結論のところで，検討対象になった自然談話資料における応答詞総数 2840 例中，ハイ系が 94.9%，イイエ系による本来の否定的応答は 2.0% であることを明らかにしている。

15）「はい」を始めとする応答詞の研究もいくつか発表されている。筆者が参照することができたものとしては，「はい・ええ・うん」の用法の違いを調べた土屋（2000），「はい」と「ええ」の使い分けを調べた日向（1980）や二宮・金山（2005, 2009）や金山・二宮（2010）がある。また，「ええ」単独の機能を明らかにしようとした冨樫（2005）や，「うん」と「そう」の品詞論的な研究の定延（2002）がある。

16）朝日新聞，2013 年 8 月 2 日付 14 版，p. 4 の記事「所信表明」にある記者と渡辺美樹の対談のなかの一節。

17）フランス・ドルヌ氏は，青山学院大学のホームページによれば，「北フランス出身，専門は言語学（発話理論と日仏対照研究）。小学校の時から日本の文化に興味をもち，学生時代に留学生として来日し，一時帰国の後，青山学院の教員として再来日」とある。

18）この文献の存在は，ほかのいくつかの文献とともに，国立国語研究所の日本語教育研究・情報センターの野田尚史氏に教えていただいた。記して感謝申し上げる。

19）山内は「応答の論理は，ドイツ語の場合は『対応の論理』，日本語の場合は『即応の論理』として特徴付けられよう」（95）とするが，注の 13 にて，「これを一般化すれば，いわゆる対話（Dialog）において働くのは前者［対応の論理］であり，これが基盤となって対話の論理または方法としての弁証法（Dialektik）が成立しているといえるのではなかろうか」と述べている。山内のこの指摘は，筆者が本稿の 2.1.2. で紹介した「日本語の話者とその相手は，会話（conversación）をしているのであり，対話（diálogo）をしているとは考えにくい，という指摘」と軌を一にしているのではなかろうか。

20）例文のふたつめは「No lo digas a nadie. —*Sí*, lo diré a todo el mundo. 誰にも言うなよ。—いや，みんなに言ってやる」である。これは話し相手と対決する姿勢の応答であり，一般的な日本語の応答形式を検討する例としては不適当であろう。

21）高橋の『スペイン語表現ハンドブック』（1998: 293）でも「返答」の「1. 肯定」の「a. はい」に sí を置き，「［問いかけに対して「はいそうです」と単純に応える．否定疑問に答えるときは，「いいえ」という訳になる］」と注意しているし，上田の『スペイン語文法ハンドブック』（2011: 329）でも「no をつけた疑問文の答えの No は日本語では『はい』『うん』にあたります」と断っている。

22）筆者の印象である。詳しい調査はしていない。

23）初級スペイン語教育の現場では，スペイン語の ¿Quieres ir conmigo? のような肯定疑問文を，日本語らしい「（君は）いっしょにいきたくない？」という否定疑問文ではなくて，文型通り「君は私と一緒に行きたいですか」と訳すことが多いのではなかろうか。初級段階では日本語らしさまでを考慮に入れて教えるのは難しいことであり，まず肯定文・否定文の作り方を優先するためにそうなるのであろう。初級会話の説明書であるマルティネルほかの『スペイン語会話表現事典』（1998: 21）でも，人を誘うときの言い方として ¿Quieres (…)? をあげて，それに「君（…）したい？」という日本語を付けている。「君（…）したくない？」とするほうが日本語らしいであろう。

24）この点に関しては，本稿の 2.3.2. で紹介したドルヌの鋭い観察を参照されたい。

25）水谷信子は同じところで「行きませんか」という質問が事実についての情報「を求めるものと解釈した場合，相手が否定の答えを期待していると考えて『はい，行きます』と答える」と述べているが,「行きませんか」が事実についての情報を求めている表現になることには，筆者は疑問を感じる。言語直感の問題かもしれないが，筆者なら，事実についての情報を求めるのなら「行かないのですか」とか「行かないんですか」と言うであろう。

26）英語の yes-no 疑問文への応答の仕方については，鈴木（2004）が興味深い報告をしている。

27）①の「iv)［否定語句に続けて］Vino la señora no sé cuántos; *sí*, esa rubia, y dijo que volvería más tarde.」という例文の提示は，筆者には理解できない。否定文に続いて対比の意味の肯定表現として sí が使われる，ということであろうが，この例文の先行文は肯定文である（Vino ~）。この①の iv) の用法は，本稿 1.3.2. で紹介した García de Diego のふたつめの用法「確認するための小辞として，本来は先行する否定的な文に対置される形で使われる（383-4）」の用法のことであろうか。

28）Beinhauer は，限られた場合には sí（とか no）だけの応答もあるが，普通は señor, hombre, mujer などの呼びかけ語を伴う，と指摘している。

29）本稿の考察に直接関係しないが，『スペイン語新文法』にはさらに，sí の虚偽の了解という使い方について述べている。先行文の内容を了解して，直後にそれを拒絶する用法である：Sí, en eso estaba pensando yo;「はい，私もそのことを考えていました」; Sí, no tengo otra cosa que hacer.「はい，私にはほかにすることもありません」（30.11t）。また，拒絶するためのレトリックの sí もある：¡Sí, hombre!「そりゃそうだ！」（32.7t）。ともに文脈的な語用論の用法である。

30）「はい」と sí の使い方の対比という点には関係ないが，importar「迷惑である」を使って許可を求める真偽疑問文に関する興味深い指摘がある。応答が 1 度の sí なら応答者は許可を与えていないが，肯定の応答詞を 2 度繰り返せば許可を与えた応答になる：¿Te importa que abra la ventana? – Sí.（あるいは）– Sí, claro. / Sí, sí, claro, claro.「窓を開けてもいいでしょうか」―「だめだよ」（あるいは）「はい，いいですよ」（II, 248-9）。英語にも同様の動詞 to mind があって，この動詞を使った応答の yes, no についてはよく話題になっている。金田一（1981: 239）は「私どもは，英語などの yes と no の使い分けが難しい。たとえば，向こうの人から “Do you mind opening the window?”『窓を開けてもいいか』と言われますと，窓を開けてもいい，と言うときには，つい，私などは “Yes.” と言いたくなりますが，“Yes.” ではいけないのですね。mind（気にかける）の反対ですから “No.” と言わなければいけない」と述べているが，スペイン語の場合と同じように，（めったにないが）Yes だけの応答なら「だめだ」になるが，Yes, certainly. のように応答詞を繰り返せば「どうぞ」ということになるようである（質問が配慮表現であるから，拒否するときは，普通なら I'm sorry, but… のような言い方になるであろう。cf.『小学館ランダムハウス英和大辞典』（1994: 1635）。

31）意義の拡張と言う視点からは，筆者は「相づち用法」がプロトタイプで，それから「応答用法」へ，そして「応答用法」から「非応答用法」へ拡張したのだと仮定している。

32）②［承諾して］に相当するスペイン語に sí は含まれていないが，含めるべきであろう。

33）Steel（1976: 59）には 24 種類の肯定応答表現が示されている。なお，スペイン語の肯定や否定の応答表現の微妙な相違については，ティノコ（1985）のコメントが興味深い。

34）この日本人の社会構造の変化を理解するためには岩村暢子の研究が参考になる。たとえば岩村（2013）は，日本人の実生活における具体的な生活態度の調査に基づいて，日本では 20 世紀の中頃を境にして生活態度の際立った変化が起こっていると主張している。

参考文献

有本紀明など（編）（2001）『和西辞典（改訂版）』，白水社。

池上禎造（1952）「『はい』と『いいえ』」，『国語国文』（京都大学国文学会），217 号，21 巻第 8 号，55–58。

今石幸子（1993）「聞き手の行動：あいづちの規定条件」，阪大日本語研究，5，95–109。

岩村暢子（2013）『日本人には二種類いる』新潮新書。

ウィラシンハ・ディリニ・サハンティカ（2012），「日本語とシンハラ語の応答表現の対照」，東京都立大学国語学研究室『日本語研究』，32，163–175。
上田博人（2011）『スペイン語文法ハンドブック』，研究社。
大曽美恵子（1988）「英語のあいづち」，『日本語学』，1988 年 12 月号，46–51。
大浜るい子（2004）「日本語の自然会話における真偽疑問文と応答詞『はい』の関係について」，『日本語教育』，123 号，37–45。
奥津敬一郎（1988）「日本語における『はい』と『いいえ』の機能」，『日本語教育の現代的課題』，津田塾会四十周年記念日本語国際シンポジウム，48–57。
生越直樹（1988）「朝鮮語のあいづち」，『日本語学』，1988 年 12 月号，12–17。
金山泰子・二宮理佳（2010）「非母語話者の『はい』と『ええ』の使い分けについて」，国際基督教大学『ICU 日本語教育研究』，7，19–32。
北川千里（1977）「『はい』と『ええ』」，『日本語教育』，3 号，65–72。
北原保雄（編）（2002）『明鏡国語辞典』，大修館書店。
金田一春彦（1981）『日本語の特質』，日本放送出版協会。
久野暲（1973）『日本文法研究』，大修館。
黒崎良昭（1987）「談話進行上の相づちの運用と機能」，『国語学』150 集，122–109。
桑名一博など（編）（1990）『小学館 西和中辞典』，小学館。
小泉八雲（平川祐弘編）（1990）『日本の心』，講談社学術文庫。
国語学会（編）（1980）『国語学大辞典』，東京堂。
定延利之（2002）「『うん』と『そう』に意味はあるか」，定延利之（編）『「うん」と「そう」の言語学』，ひつじ書房，75–112。
小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会（編）（1984）『小学館ランダムハウス英和大辞典』。
小学館国語辞典編集部（編）（2006）『日本国語大辞典』（精選版），小学館（初版の出版は 1970 年代）。
正保勇（1988）「インドネシア語のあいづち」，『日本語学』，1988 年 12 月号，31–37。
鈴木雅光（2004）「yes-no 疑問文の応答について」，『東洋大学大学院紀要』，41，503–518。
高垣敏博（監）（2007）『小学館西和中辞典（第 2 版）』，小学館。
高橋覺二（1988）『スペイン語表現ハンドブック』，白水社。
田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」，音声文法研究会（編）『文法と音声 1』，くろしお出版，257–279。
ティノコ，アントニオ・ルイズ（1985）「Decir que sí. Decir que no. No que sí ni que no」，『NHK ラジオスペイン語講座』4 月号（68–70），5 月号（60–62），6 月号（56–58）。
土屋菜穂子（2000）「感動詞の分類――対話コーパスを資料として――」，『青山学院大学文学部紀要』，41，239-255。
土井忠生（訳）（1955），ジョアン・ロドリゲス（著）『日本大文典』，三省堂（初版は 17 世紀初頭に長崎で出版）。
ドルヌ，フランス（1988）「フランス語におけるあいづちの機能」，『日本語学』，1988 年 12 月号，38–45。
冨樫純一（2002）「『はい』と『うん』の関係をめぐって」，定延利之（編）『「うん」と「そう」の言語学』，ひつじ書房，127–157。
冨樫純一（2005）「肯定・検索・問い返し――感動詞『ええ』の統一的記述を求めて」，筑波大学文藝・言語学系『文藝言語研究。言語編』，48 巻，77–93。
中島悦子（2001）「自然談話における応答詞の使い分け――『はい』と『うん』，『いいえ』と『ううん』――」，『国士舘短期大学紀要』，26，75–99。
中村平治（1988）『日英語の依頼と応答』，大阪教育図書。
二宮理佳・金山泰子（2005）「『ええ』の機能についての一考察：『はい』との比較を通して」，国際基督教大学『ICU 日本語教育研究』，2，51–64。
二宮理佳・金山泰子（2009）「『はい』『ええ』の使い分けに関する考察―テレビ映像を使用したインタビュー調査を通して―」，国際基督教大学『ICU 日本語教育研究』，6，3–24。

野田良治（編）（1963）『日葡辞典』（A-K），有斐閣（原典は 17 世紀初頭に長崎で出版された，ポルトガル語による日本語の辞典）。
萩谷祥子（2006）「日本語のよびかけに対する応答表現『はい』に対応する中国語」，『中国古籍文化研究』第四号，118–127。
畠弘己（1988）「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」，『日本語学』，1988 年 3 月号，100–117。
原誠など（編）（2005）『クラウン西和辞典』，三省堂。
日向茂男（1980）「談話における『はい』と『ええ』の機能」，『国立国語研究所報告』，65 号，215–229。
堀口純子（1991）「あいづち研究の現段階と課題」，『日本語学』，1991 年 10 月号，31–41。
堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』，くろしお出版。
松田陽子（1988）「対話の日本語教育学――あいづちに関連して――」，『日本語学』，1988 年 12 月号，59–66。
マルティネル，E. など（1998）『レヴェル別　スペイン語会話表現事典』，三修社（訳者：原誠・江藤一郎）。
水谷修（1979）『日本語の生態』，開拓社。
水谷信子（1985）『日英比較　話しことばの文法』，くろしお出版。
水谷信子（1988）「あいづち論」，『日本語学』，1988 年 12 月号，4–11。
水野義道（1988）「中国語のあいづち」，『日本語学』，1988 年 12 月号，18–23。
宮城昇など（編）（2001）『現代スペイン語辞典（改訂版）』，白水社。
宮本・マラシー（1988）「タイ語のあいづち」，『日本語学』，1988 年 12 月号，24–30。
三好準之助（2013）「日本語の和らげ表現について――『試論』の諸問題――」，京都産業大学論集，人文科学系列 46 号，1–28。
メイナード，泉子・K（1987）「日米会話におけるあいづち表現」，『月刊言語』，1987 年 11 月号，88–92。
メイナード，泉子・K（1993）『会話分析』，くろしお出版。
森田良行（1973）「感動詞の変遷」，鈴木一彦・林巨樹（編）『品詞別 日本文法講座 6 接続詞・感動詞』，明治書院，177–208。
森山卓郎（1989）「応答と談話管理システム」，『阪大日本語研究』，1，63–88。
山内貞男（1966）「応答の副詞――Ja と Nein――の論理 日本語における『はい』，『いいえ』と対照して」，『桃山学院大学紀要』，3（2），87–99。
山根智恵（1994）「『はい』，『ええ』，『うん』の形態と機能――電話の会話をもとに――」，岡山大学文学部国語国文学研究室『岡大国文論考』，22，436–354。
ルビオ (Rubio, Carlos) など（編）（2004）『クラウン和西辞典』，三省堂。
Alvar, M. & Bernard Pottier (1983), *Morfología histórica del español*, Gredos, Madrid.
Beinhauer, Werner (1978), *El español coloquial*, Gredos, Madrid (título original: SPANISCHE UMGANGSSPRACHE, Bonn, 1958).
Corominas, Joan (1973), *Breve diccionario etimológico de la lengua castellana*, 3.ª ed., Gredos, Madrid.
García de Diego, Vicente (1970), *Gramática histórica española*, 3.ª ed., Gredos, Madrid.
Hernández Gómez, Elena *et al.* (2005), *Diccionario panhispánico de dudas*, Real Academia Española, Asociación de Academias de la Lengua Española y Santillana Ediciones Generales, Madrid.
Larousse (2005), *Gran diccionario de la lengua española*, Spes Editorial, Barcelona.
McGloin, Naomi H. (1998), "*Hai* and *Ee*: An Interactional Analysis", *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 7, 105–119.
Matte Bon, Francisco (1992), *Gramática comunicativa del español: Tomo I (de la lengua a la idea), Tomo II (de la idea a la lengua)*, Difusión, Madrid.
Miyoshi, Jun-nosuke (2012), *La atenuación del japonés —un ensayo pragmalingüístico—* , Editorial Académica Española (LAP LAMBERT Academic Publishing GmbH & Co., Saarbrücken, Alemania).
Real Academia Española (2001), *Diccionario de la lengua española*, 22.ª ed., Espasa Calpe, Madrid.
Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española (2009), *Nueva Gramática de*

la Lengua Española, Espasa Libros, Madrid.
Seco Raymundo, Manuel *et al*. (2011), *Diccionario del español actual*, 2.ª ed., Aguilar, Madrid.
Steel, Brian (1976), *A Manual of Colloquial Spanish*, SGEL, Madrid.
Yngve, Victor H. (1970), "On Getting a Word in Edgewise", Chicago Linguistic Society, *Papers from 6th Regional Meeting*, 567–578.

On Japanese HAI and Spanish SÍ

Jun-nosuke MIYOSHI

Contents

1. HAI and SÍ in dictionaries
   1.1. Contemporary meanings in monolingual dictionaries
   1.2. Contemporary meanings in bilingual dictionaries
   1.3. Etymological data
2. Studies on HAI
   2.1. Studies on AIZUCHI
   2.2. Usage of HAI
   2.3. Contrastive studies on AIZUCHI
   2.4. Reply to the Japanese YES/NO questions
3. Usage of SÍ
   3.1. Dictionary data
   3.2. Usage defined from a normal grammar's viewpoint
   3.3. Usage defined from a pragmatic viewpoint
4. Correspondence of HAI and SÍ as a conclusion
   4.1. How does HAI correspond to SÍ?
   4.2. How does SÍ correspond to HAI?
   4.3. Conclusion
Notes
Bibliography

Keywords: HAI, SÍ, AIZUCHI, allocentrism, individualism